はじまり

ジェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
はじまり

【Ｎコード】
Ｎ３９８３Ｊ

【作者名】
ジェル

【あらすじ】
歴史上最大最悪のテロル・テロリズム。世界同時多発テロ。そんなもんに巻き込まれてあっけなく死んだ…はずの私。なのに、目がさめれば小説とかで絶対いるはずの天使のかわりに、透明の空気の塊。‘姫’やら‘女神’やら言われて、もう軽くパニック。え、ってかここどこよ！？　だーれーかー！！！　助けてーーーー！！！！これでも、一応コメディー目指してるんです。主人公最強、ご都合主義です。そして、ノリが激しいです。

プロローグ

それは、いつもと変わらない日常。

……のはずだった。

「ふわぁ…っ。ねむっ…」
ぐんっと腕を上にのばして欠伸をする。
三時間目の休み時間。
窓から、温かくポカポカと陽気が降り注ぎ、眠気を誘う。
たった１０分の休み時間は、この睡魔を大人しくさせるには全く足りない。
あ～あ、昼休みが待ち遠しい。
あと、１時間の辛抱だぁと机に寝そべりながら、ふと視線を感じて隣を見ると、隣の席の幼馴染と目があった。
「何みてんのよ、きもい」
「は？違うし」
じとっと冷ややかな目線を送ると、幼馴染は少し視線をずらして私の目を見た。
どうやら、本当に私のほうを見ていたわけではないらしい。
きもいとか言って、悪かったかな…。
なんて、ちょっとばかし思った私に、幼馴染は
「あの、光ってんの…何？？」
そう言うと、私を通り越して窓を指差した。
私も、首を１８０度回転させ、彼が指差した方向を見やる。
青い空。
白い空。

「何って…」
それと、もうすぐで昼だというのに大きな星のようなものがキラキラと光っている。
いや、太陽の光を受けてギラギラと。
「飛行機じゃん??」
私は普通にコメントし、飛行機から目を離す。
そう、飛行機だった。
「って、え゛?!?!?!?!?!」
違和感を感じて、もう一度、見る。
「大きく…ない??」
「高度が低すぎる」
「しかも…近づいてきて…ないですか??」
そう。
なんか…まるで……ここに突っ込んでくるかのように。
私は、思わず立ち上がって、幼馴染の背中に隠れる。
飛行機はここから見て、１０メートルほどの大きさに見える。
あっという間に…２０メートル……３０メートル……
そしてそれが、こちらに、この学校に、真正面からぐんぐん迫ってきているのだ。
「うそーん?!?!?!」
私は、彼の肩をがしっと掴んだ。
飛行機のエンジン音で周りも気がついたようだ。
それからは、混乱。
我先にと教室から出て行く。
振動でがたがたと窓が揺れ、益々恐怖を煽る。
「やだ、に、ににににげよう!!!!!!」
私は、冷静にそのまま座っている幼馴染の手を引っ張った。
でも、幼馴染は冷静に、諭すように言った。
「もう、逃げ切れないって」
その間にも、飛行機はこちらに飛んでくる。

耳をつんざくような絶望と恐怖の声が響く。

「いやぁぁああ！！！！」
「たすけて！！！！」
「死にたくないよ！！！！！」
「誰か！！！！」

その声に、騒音に、思わず耳を覆った。
「あ、あきらめんの！？」
幼馴染に叫ぶ。でも、飛行機のエンジン音で自分の声も耳に届かない。
「いや、いやだ…死ぬの？？」
私は耳を塞いだまま、しゃがみ込む。もはや、自分がしゃべれているのかもわからない。
振動で窓が壊れ、飛び散ったガラスが顔に突き刺さる。

――――――――――飛行機はもうすぐそこ。　唸り声をあげて、両手を広げ、猛獣のように。

目をつむる。
どうしてそんなに落ち着いていられるのよ？！
飛行機が、太陽の光を遮って、座っている場所に陰ができた。

「いやあぁぁあぁぁぁ――――――――――――――――……」

私はたぶん、最後に絶叫したんだと思う。
自分の最後の声も聞こえなかったけど、

『愛羅（あいら）。また会えるって』

幼馴染がそう言った気がした。

歴史上最大最悪のテロル・テロリズム。
９．１１の再来。
世界同時多発テロ。

そのすべてが公共施設を狙うもので、被害者は3億人にものぼった。
それが引き金となり、国家は崩壊。
戦争が絶え間なく続き、ついには人類滅亡の危機。
そこに、小惑星の落下。

人類滅亡。
世界は終わった。

プロローグ（後書き）

うん。頑張りますので、どうか長い目でお付き合いください。
よ、よよよよろしくお願いします。

ここ、どこですか??　【1】

「ん〜…」
ポカポカする。
お日様の匂いと草の香り。
鳥のさえずりまで聞こえてくる。
そよ風が吹き、鼻の香りを運んでくる。
――気持ちぃー…
私は幸せな気分で、寝返りを打つ。
その時、頭に声が響いた。

――――――――『愛羅。また会えるって』

小さいころから聞きなれた幼馴染の声。
「星夜……」
……うん??
星夜がそれをいったのは……いつだったっけ…??

――――――――いやぁあ
――――――――たすけて
――――――――死にたくないよ
――――――――誰か
――――――――誰か!!!!

「いや!!!!!」
私は頭を抱えて飛び起きた。

「……っ」

まだ、頭に響いている。こびりついている。
死を前にして荒れ狂うクラスメイト。
恐怖の声。
死を悟った人の絶叫。

「うっ……！！」
吐き気がこみ上げた。
「は…っは……はぁ…」
落ち着け、愛羅。
そう言い聞かせ、胸のむかつきを抑えて深呼吸してみると、気持ち悪さはなくなった。

そうだ、私は死んだのだ。
…とすると、ここは天国??

あたりを確認する。

緑豊かな草原。
人の手が加えられていないような、健康的な森。
種類豊富な色とりどりの花。
あちこちに枝を伸ばす木。
平和な鳴き声を上げる鳥。
見たことのない、蛍光色の蝶。

…うん、天国と呼ぶにふさわしいな、おい。
しかし、三途の川がないぞ。
おばあちゃんが手を振っている……わけでもない。
そうか、実際の天国にはあれは存在しないんだ。

あれは人間の想像だったのか。

なんて思いながら立ち上がる。少しよろけてしまい、おばあさんかよ、と少し笑ってしまった。

こういう場合本では、だいたい閻魔様とか神様とか天使とか出てきて案内してくれて、『生き返りたいですか？？』ってなるはずだよね。

「となると、天使でも探すかーー」

と、両手を伸ばして伸びをし、気合いを入れるため両手で頬をパチンと叩く。

〝姫様、姫様〟

どこからか、そんな声が聞こえてきたので、私はパッとあたりを見回す。が、先ほどと変わらぬ風景が広がっており、かわいい声の主も「姫様」も見当たらない。

「げ…幻聴……？？」

いよいよおばあさんかもしれない。と、人知れず身震いする。

〝さむいの？姫〟

〝そういえば、さっきはつらそうにしてたわ〟

〝風邪かい？姫〟

また聞こえた。

ふと、気配を感じて振り返る。

「――――――え？？」

そこには、５ｃｍほどの無色透明、空気の塊が３つ浮かんでいた。

それが、少しずつはっきりしだすと、やがて小さい人の形になった。

「だ、誰ですか……ハッ！！もしや天使？！」

〝てんし??〟
〝姫はてんしなの??〟

キョトンと〝私〟を見上げてくるそれに、まさか、と思った。
「姫って…もしかして私!?」
自分で自分の言ったことにびっくりして自分を指差すと、女の子2人と男の子1人は私の胸のあたりをくるくる飛び出した。

〝姫は姫〟
〝姫様〟
〝女神よ〟

「めがみっ?!」
またもやびっくり。思わず、素っ頓狂な声が出た。

〝私たちは精霊〟
〝姫は精霊の神〟
〝女神様〟

「へ?　精霊??」

――――――精霊。
聞いたことはある。
万物の根源をなすといわれ、個々に宿っているとされる超自然的な存在。
「あなたたちが精霊……」
天国はファンタジーだな!!!!
〝そうよ。姫様は私たちのてっぺん。偉いひとよ〟
〝姫は万物の精霊に好かれてる〟

〝みんな、姫のことが大好きだよ〞

「……といわれましても。」

〝精霊使いはめずらしい〞
〝みんな私たちに気がつかないよ〞
〝姫様はすごいの。みんな、姫様の言うとおりにするわ〞

〝女神様。女神と同じ名前。魂に刻まれた、名前〞

「名前…？？　愛羅がどうかしたの？？」

愛羅。そう言うと、精霊たちはキャ―と騒ぎ、口々に言いだした。

〝アイラ様。伝説の神〞
〝女神様なの、アイラ様〞
〝アイラ様は精霊の神だから〞

歌うように、精霊は可愛い声で飛び回る。

〝姫は女神〞
〝女神は姫〞
〝えらばれしもの〞

「……う～ん……よくわかんないけど……」
首をかしげると、3人はあからさまに　しゅん…とした。
うっ…！！
美少女、美少年を悲しませるなんて、私、最低ね！！！！！！！！
「あぁ！！ごめんね！！あの、精霊さんたち――…」

〝姫！！なんか来るよ！！〝

「へっ！？」

〝ニンゲンが来るわ。姫様〝

〝いっぱい来てる〝

〝たくさん来てるよ〝

〝山の向こう〝

男の子がそういうと姿を消した。

〝ニンゲン、利用する、姫のチカラ〝

女の子もすぅ…と溶けるようにいなくなる。
姿は見えないけど、まだそばにいるのがわかる。
もう1人の女の子は、私の前に飛んでくると、ふんわり笑った。
そして、私のおでこに小さな手をのせる。

〝私たちは風の精霊（シルフ）。いつでも姫のそばにいるわ〝

気持ちのいい風が吹いた。風が、草が、花が、そうよと言っているかのようにそよぐ。

〝ニンゲンの姫、セシフィーの姫はいい人。私たち、伝える〝

「セシフィー？？」

〝音の精霊（フォーン）は、言葉、伝える。姫様の言葉はニンゲンに伝わるわ〝

女の子が消えるのと、馬の嘶きが聞こえたのは、ほぼ同時だった。

馬？？

そちらを見ると、なにやら軍隊みたいなのが砂埃をあげながらこちらに……

こっちに、来る！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

「ギャーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

私は心の限り叫んだ。

うん、逃げよう。

まわれーみぎっ！！

私は反対方向に向かって走り出した。

【2】

ドドドドドドド……！！！！

「ひぃぃぃいいいいぃぃい！！！！！！！！！！！！！」

後ろから響く馬の蹄の音。
怖すぎるっしょ！！後ろから凄い音で追いかけられるって、一番嫌な状態！！！！

ドドドドドドド……！！！！

馬相手に勝てるはずもない。
しかも、私は運動が苦手なのだ。
音はどんどん近づいてきて、しまいには追い抜かれた。
……追い抜かれた？？？？
「とまれーーー！！！！！」
太い声が響き渡ると、馬に乗った隊長のような人が私に向き直り、思わず足を止めた私をじっとみつめてきた。

あぁ…天国に来てまで、ありえない展開で殺されるんだわ…

絶望に打ちひしがれる私は、死んだ魚のような目で彼を見る。前には、１００人はいる兵が馬に乗り、同じく私を見下ろしていた。逃げらんないし、逃げる気力もない。

「突然の無礼、お許しください」

２０歳ほどの茶髪茶眼の彼は、身軽に馬から降り立つといきなり私

にお辞儀をした。
うん、イケメン。私、こんな人に殺されるのね…よよよ…
「私はセシフィー国王女親衛隊隊長のコリン＝チェーカと申します。この度は、ようこそおいでくださいました」
ようこそ…って……天国へ??
……Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｐａｒａｄｉｓｅ!?　Ｈｅｖｅｎ!?
私が死んで喜んでるのねっっ?!?!?!
ひどいっっ!!!!
ギロッと睨んでみたが、コリンさんの目から殺意は感じられないので、どうやら私を殺そうとしているのではないと思い、ちょっとホッとした。
…にしても……
「天国にも国があるんだね」
「テンゴク??」
コリンさんは首を傾げた。
「あ～パラダイス??　ヘヴン??」
「パライス??　ヴン??」
わたわたしだしたコリンさんは、ちょっとおもしろい。もっと、英語をいってやろうと二ヤけたとき、
「あ、そうでした!!　異世界人は、言葉が通じないんだった!!　フィニー!!姫にご加護を…」
ポンと手を叩いて、コリンさんは後ろの自分が引き連れてきた親衛隊の一人――――フィニーと呼ばれた薄い赤色の髪をした美人さんに呼び掛ける。

私には、「いや、あの通じてますよ〜？？」というヒマも与えてはくれないらしい。
フィニーさんは、すたすたと私の前まで歩いてくる。
髪とは違い、目は茶色のフィニーさんは、突然私の前で膝をついて頭を垂れた。
「？？？」
「精霊の女神さま。ようこそおいでくださいました。私めにも、万物の精霊が喜んでおられるのを感じます」
そう涼やかな声で言い、私を見て二コッと笑った。

……くそー！！！！なんてかわいいんだこのヤロー！！！！負けた負けた、完敗だ！！！！

一人悶えていると、コリンさんが割り込んできた。
「だから、言葉が通じないと言っておるだろう」
「いえ、チェーカ殿。女神さまはもう音の精霊（フォーン）のご加護を受けておられます」
「何っ？！」
コリンさんがすごい勢いで振り向いて、しかもオニのような形相でこっちを見たもんだから、私はひっそりと（この人は怒らせちゃいけない）と思った。
それにしても、音の精霊（フォーン）のご加護って、言葉が伝わるってことだろうか。でも、コリンさんにあんな顔で凝視されるなんて……怖すぎる。いけなかったのだろうか。やっぱり殺されたりしないよね…？？お助けぇ！！！！神様ぁ――――！！！！！！！！！

〝もしかして、あなたが姫？？〟

不意に、風の精霊（シルフ）と話した時のように、頭に声が響いた。
「だ、誰ですか…？？」

〝うふふっ。姫ったら、礼儀正しいのねっ〟
〝私たちは水の精霊、ウンディーネ〟

「水……」
「姫様。どうかされましたか？」
と、コリンさんの声が耳から入ってきた。
〝姫と私たちの会話に入ってくるなんて…無礼者！！〟
と何故かキレる水の精霊（ウンディーネ）。
「いや、あの水の精霊さんが……」
〝わからないわよ、その人たちには〟
〝私たちが声を聞かせるのは女神様だけなんだもん〟
「水の精霊っっ？！？！？！？！？！」
うぅ、頭が痛いので頭やら耳やらから話しかけないでほしい。
「流石女神様であられる」
〝当たり前よね〜〟
〝ね〜〟
「姫とは違い、今度は正真正銘、精霊の女神だ」
〝女神は世界に祝福される〟
〝精霊はあなたの言うことなら、すべてきくよ〟
「めっがっみ、めっがっみ」
馬にまたがった親衛隊の方々が、何やら女神コールをしだす。
〝もう、ニンゲンうるさーい！！〟
〝ほんとよ！！〟
〝じゃじゃーん！！〟
〝火の精霊（サラマンダー）も飛び入り参加〜〜！！〟
〝女神を見にきたよ〟
「めがみ！！めっがみ！！」
〝姫。困ったことがあったら、いつでも火の精霊に言ってね〟
私は心の中で言い返す。

《今、めっちゃ困ってるんですけど。》
〝えっ？！そうなの？！〟
あ、心の中でも会話できるんだ。
「女神っ！！女神っ！！！！！」
〝姫ーっ〟
〝ニンゲン、焼き払ってあげようか？？〟
「女神――――！！！！女神――――――！！！！！！！」
〝そうよ、洪水をおこしましょう。姫様のチカラがあれば――…〟
〝何っ？！　火だって言ってるだろ！！〟
〝何言ってんのよ！！　洪水のほうが平和的だわ！！〟
「女神――――――――…」
〝姫――――――――…〟
私はあまりのことに眩暈と頭痛を引き起こし失神。熱烈な女神コールと、火と水の精霊のケンカを聞きながら、こういうところで気を失えるなんて、流石主人公！！なんて思いながら、意識を手放した。

星夜……

幼馴染は、学校で悪さばかりしていたから、天国にこれていないのだろうか。

「ん……」

目が覚めると、そこはうっそうと生い茂った森の中で、見たこともないようなでかい鳥が奇声を発しながら空を飛んでいるのが見えた。
「どこだよ…」
少し、頭がズキズキする。
眩暈もするし、さっきから、愛羅の声が耳にまとわりついている。
『星夜……学校で悪さばっかりしてっから、天国へいけないんだよ』

俺の空想のなかでも、愛羅はマトモなことを言えないのか。
でも、たしかに俺は死んだのに、ここは天国じゃない。かと言って、地獄でもないと思う。
「じゃあ、どこだよ」
なんて、一人でつっこんでも、さみしいな、おい。
「愛羅――――……」
また会える、とか死ぬときに言ってみたけど、本当に会えるだろうか。てか、愛羅は天国に行けたのかよ。あいつも、いうほど真面目じゃなかったぞ。でも、俺だけ地獄とかシャレになんねぇ。
こんなことなら、校長のカツラを釣ったり、いきなりコンビニにたむろってた不良を殴り飛ばしたり、校長の椅子に接着剤なんて塗る

んじゃなかったな。

俺は今までの人生に後悔しつつ、溜め息をついて、歩き出した。

目覚めたら

「…うぅ〜ん……」

「あ、お目覚めですわ」
「ごきげんよう、姫様」

「ひぃぃいぃいぃいいめぇぇえぇえぇえ？？？？」

ひめ………
姫……
姫！！！！！！！！！！！！！！

その途端、今までの光景が一瞬にして蘇り、私はバッと体を起こした。

そこには、メイド服を着、ピンクの瞳と髪をした15歳ぐらいの同じ顔の女の子が私の顔を覗き込み、にっこり微笑んでいた。
それを見て、私の口から出てきた言葉は――――…

「ドッペルゲンガー……」

すると、二人は同じ仕草で首を傾げ、同じように動いて顔を見合わせる。
「ドッペルゲンガーとは、なんですの？？」
「姫様の国の言葉でございますか？？」
首を傾げる二人はまるで鏡に写したようにそっくりで、私はハッとした。

「あ、双子？？」

そういうと、二人は頷いて、
「私は、姉のステューシーと申します」
「私は、妹のモスキュートと申します」
とお辞儀。
「私たちは、姫様の身の周りのことを任されております」
と、ステューシー。
「質問など、なにかありましたら、なんでも言いつけくださいませ」
と、モスキュート。
質問……ありすぎて困る。でも、まずは！！！！
「じゃ、じゃあ、この乗り物はなに？？」
それは、さっきから気になっていることだった。
豪華な装飾のつけられた部屋は時々微妙に揺れ、カーテンから覗く景色をみると、動いているらしかった。シャンデリアに天蓋のついたベッド。宝石を散りばめたようなキラキラと光る家具たち。
窓から見える風景さえなければ、私ははきっと、ここは普通の地上に立っている部屋だと思っただろう。

それだけならまだいいが、気がつかないほど微弱にしか揺れないこの乗り物は、私が知っている車ではいくら舗装された道路でもありえない。
ということは、天国は地球より科学技術が進んでいるということだろう（ニュートン、ガリレオ、リービッヒにファラデーにアインシュタインにボーアに…と死んだ世界の偉人の天国での発明品だろうか）……と、私は推理したのだ。で、この乗り物の正体が、知りたい！！！！
「そうですね、名前は“コア”と言います」
「じゃあ、だれの発明なの？？ニュートンやガリレオやアインシュタインは天国に来たんでしょう？？」

「テンゴク、とはなんでしょうか」
「ニュートンや、アインシュインとやらも、私が知る限りこちらにはいませんが」
「へ？？　ここは、死んだ人が来る場所じゃないの？？」
「ま、まあ？！何ということをおっしゃいますの？！」
「姫様、それはセシフィー国に対する冒涜と捉えてもよろしいのでしょうか」
顔を真っ青にしたステューシーと、怒ったように言うモスキュートに、私は慌てて弁解する。
「違うのよ！！人は死んだら、天国に行くって私は思ってたから……うん…そう……私、死んだんだよ。だから、ここは天国かと思ったんだよね。ごめん」
へへっと笑う。
「そうでしたの…。では、姫様は、アイラ様として、このオールバーナインに、いえ、セシフィー国に生き返られたのですわ」
「そうですわ。現に、姫様は今セシフィーの中枢“マッオ”に向かい国王様に会われるのですから。ここは、死者の国でもありませんし、姫様は生きておられますわ」
生き返ったって言われても……
「いや、普通生まれ変わったら赤ちゃんから始まるでしょ。記憶ないでしょ。私、１８だよ？？」
「……そうですわね、はい。もしかしたら、精霊がよんだのかも…」
そうモスキュートがひかえめに言った瞬間、恐ろしい言葉が頭に響いた。

〝よんだよんだ〜〜〝
〝だって、つまんなかったんだ〝
〝人間は私たちの言葉分からないしね〜〝

「お前らかぁーーーーーーー！！！！！！！！」

叫んだ私は悪くない。
双子ちゃんがいきなり絶叫した私に怯えていたけど、悪くない。

しばらくして私は、どうやら寂しがり屋な精霊たちに、精霊の神アイラ様の同じ名前だったからというふざけた理由で、異世界に召喚されたらしいということが分かって、また、暴れて双子を困らせた。
いや、私は悪くないぞ。

事情（前書き）

ポイントが入っていました！！！！！！！！！

ありがとうございます！！！！

あ～幸せ……ｗｗ

事情

しばらくして、落ち着いた私に、ステューシーがびくびくしながら言った。
「……ひ、姫様…どうかなされましたか…??」
その横で、モスキュートがコクコク賛同している。
私は苦笑しながら、
「……いや、あのね、精霊が私の名前がアイラだからこっちに喚んだって、つまんなかったから喚んだっていうもんだから、ちょっとキレちゃったってゆうか、そんな理由で喚ばれたのがショックだったってゆうか……」
頭を掻き掻き、恥ずかしげに言うと、
「「やはり、姫様は精霊様とお話ができるのでございますのね!!」」
いきなり二人して満面の笑み。
おい、双子。近いぞ。
「けれど、姫様のお名前がアイラ様であられたから喚ばれたわけではないと思いますわ」
「ええ。もちろん名前も理由の一つにあるのかもしれませんが、でも、姫様は選ばれた方に違いありませんわ」
「そうですわ、フィニー様にお聞きになっては」
「それがいいですわね」

「あ、フィニーさんて、薄い赤色の髪の美人さん??」
二人で盛り上がっていた会話に、私にも聞き覚えのある単語が飛び込んできた。
覚えてる覚えてる。いきなし、私の前に跪いた人やんね。
あんな美人、滅多に忘れられるもんじゃないぞ。

「そうですわ」
「精霊使い様は、髪の毛の色がアイラ様に近い赤色なんですのよ」
「フィニー様は、セシフィー国唯一の精霊使いですの」
「しかし、世界という枠組みで見ますと、それほど上位に位置するわけではないんですけど」
「そうですね、上の下といったところでしょうか。ちなみに上位には、最高の精霊使いと名高いアルビオン様という方がジャスタ国にいらっしゃいます」
「フィニー様なら、アイラ様にまつわる多数の伝説も知っているはずですわ」
「そうですわ！！私が呼んできますので、少々お待ちくださいね」
モスキュートが楽しそうに目をキラキラさせて、部屋…じゃなくて、コアを出て行く。
いやはや、素早い。
若いっていーね！！！！
うらやましいね！！
１８のおばちゃんには、もはや無理だわ。
うんうん頷き、はたと残ったステューシーに目を向ける。
「そだ。ステューシーって、何歳？？」
今更印象とか気にする段階ではないが、（暴れ回った後だしね）一応にっこり笑って問う。
すると、ステューシーは、私を凝視。
うわ、私の笑顔って、そんな珍獣みたいな代物？？
自分では、そんなに悪くはないはずと思って……いた…んだけど…なぁ…
悲壮な顔つきになっていたのか、ハッとしたステューシーは私の質問に答えてくれた。
「えっ、あっ、はい１５ですが……えっと、すみません。何故私がステューシーだとお分かりに？？」
「へっ」

心底理解不能だというような顔で私を見つめてくるステューシーに、私は首を傾げた。
確かに。
何故分かったのだろう。
顔のつくりとかまったく同じ双子ちゃんの名前を、確信を持って。
「う〝〜〜〜〜……ん……」
そのとき、
〝私たちが女神様に教えているのよ〟
頭に、今まで聞いたことのなかった種類の声が飛び込んできた。
いや、精霊さんだろうけどもさ。それはわかるんだけれどもさ。
んと、こういうときは念じてみればいいんだよね。たしか、気を失う前に発見したはず。
《精霊さん。あなたは何の精霊??》
〝私たちは愛の精霊、リャナンシー。全てを肯定する力。価値を認める〟
……
……
……ん〝???
《……どゆこと??》
〝えっと…〟
〝つ、つまり！全てわかっちゃうってこと！！〟
〝はあ！？〟

〝違うわよっ！！風関係の願い事は私たちが叶えるんだから〟
〝火関係は私たちサラマンダーが〟
〝水関係は私たちっ〟
〝植物は、木の精霊のドライアドっ！〟
〝花のフラワーフェアリーだっているんだから〟
〝今は来てないけど、他にもいっぱいいるのよ〟
〝地とか光とか闇とか〟
〝力や破壊とか再生なんかもいるよ〟

〝そう、私たち精霊が姫様に必要な情報を教えていたの〟

なんか、私やばくね？
チート？？　え、これチート？？
《そうなんだ！！ありがとう。あ、これからもよろしくね！！》
〝もちろんっ〟

「わかったよ、ステューシー。精霊さんが教えてくれてるんだ」
すると、ステューシーは目を瞬かせ始めた。恍惚とした表情になると、凄い勢いで近寄ってきて私の手をとり跪いた。
「素晴らしいですわ。心からお慕い申し上げます。アイラ様。やはり、あなたは救世主なのですわ。私たちが幼き頃から語り継がれてきた伝説の精霊神。出会えたこと、とても光栄です」
……

……いや、困ります。
…純粋に困ります。
勝手に救世主にされても。
伝説とか言われても。
私、レジェンド？？
いつの間に？？

う〜…頭が痛いよ〜〜〜

「気安く姫に触るな！！！！」
ビュウッ
「ギャッ！！」
？！　何が起こった？！
わたしは慌てて辺りを見回し、人影を発見した。
そう、いきなり、あのフィニーさん登場。
手から風を巻き起こして、ステューシーを吹き飛ばした。モスキュートがフィニーさんの後ろから飛び出して、白目剥いてるステューシーに慌てて駆け寄り抱き起こしている。
てか、フィニーさんそんなキャラでしたっけ。
もっと、おしとやかな大人しい感じのイメージを抱いていたんですが、わたくし。
「姫っ」
自分で吹き飛ばしたステューシーを自然に無視して、フィニーさんはすたたっとア然としている私に近寄り、ニコッと微笑んだ。
「お怪我がないようでなによりです」
しっかしあなたー。こうして見ると本当にキレイねー。
んもー、同じ女として嫉妬しちゃうわっ！！
……て、いやいやいや。
お美しいですが、君。
忘れるところでしたが、君。

……二重人格？？

〝姫に気安く触るな〟とか叫んでましたよね。全然別人に見えますが。
そして、ステューシーは危険人物じゃないよね？？ステューシーと

一緒にいて、怪我しないよね??
「……あ〜…ありがとう??」
て、私も終わってる。
ありがとう言っちゃった時点で終わってる。その前に、気を失ってるステューシー気遣わなかった時点で終わってる。
「姫に、私からいろいろと説明をしたいのですが、よろしいでしょうか」
「えっ、はい。どーぞ??」
そして、フィニーさんは説明し始めた。
うん、長いので省略させてもらうと、こう。
私が今いるのは、もちろん地球ではなく、オールバーナインという大陸。
オールバーナインは、大小さまざまな国や村で成り立っているが、主な国が、セシフィー国、アカデメイカ帝国、ジャスタ国という、三大国とよばれる国らしい。
で、私が連れていかれてるところは、セシフィー国の首都【マッオ】。
そこまで説明され、それから、アイラ様の言い伝えを聞かされた。
一部いうと、
南の聖地は精霊の住まう場所。そこを乱す者は、アイラ様の手によって例外なく排除される。
とかなんとか言う、こわ〜い内容だった。

言い伝え

はい。
わたくし、杉浦　愛羅（１８）は「伝説の精霊神アイラ様」として、このオールバーナインに生き返った模様です。
えー、うん。
異世界召喚とかいうもんです。
死んだのに召喚もくそもあるかいな。どういうこっちゃ。

〝だって、女神は死んでないもの〟
〝直前だよ。召喚したの〟

――――…え？死ぬ直前に召喚した？？　え？　おいこら、リャナンシー！！　ちょい待てや！！
もっかい説明せんかい！！　てか、それならあんな思いする前に、もっと早く召喚してほしかったよ…

〝できなかった〟
〝できなかったの〟
〝人は世界から拒絶されると死ぬんだ〟
〝今までみんなで何度も召喚しようとしたけど〟
〝世界に認められていた姫に入りこめなかったの〟
〝だから、あのときの拒絶されかけていた姫は召喚しやすかった〟

……ちょ、ちょっとわかんないけど、みんな何度も召喚に挑戦してくれてたってことだね！？
だけど、生きていた私は世界に認められてて、召喚する隙がなかったと。で、あの時、飛行機が突っ込むという完全完璧死ぬっきゃない状態だった死にかけな私は、世界から拒絶されかかってて、召喚

できるすきがあった。だから、チャンスとばかりに召喚した…と。
なんとまあ…そんな…深い理由が…いや！！深くなんかない！！
ただ名前がアイラだったからなだけじゃないか！！

〝魂に刻まれた名前〟
〝なかなかない〟

いかん。
これは、わからん。
自分的解釈の余地すらない。
だんだん精霊と言葉が交わせなくなってきたぞ。
あ、そうそう。忘れてた。
超肝心なフィニーさんに教えてもらった言い伝え。
もうなにがなんだか分かんないですが、丸暗記しましたので、さーーあ、いってみよーー！！
ドンドンパフパフーーーーー！！！！（キャラ崩壊）

「南の聖地は精霊の住まう場所。そこを乱すものは、アイラ様の手によって例外なく排除される」

南の聖地とは、私が倒れてたあの自然豊かな天国もびっくりの平野。
あそこには、万物の精霊が住んでいるとされ、アイラ様を守っているとか。
で、その後の文の怖ーい単語についてだが。
言い伝えはずっとあったけれど、信憑性がなかったため、昔あるバカが「はあ？神様なんていねえよ！！」的な考えのもと、南の聖地に建物を建てようとしたらしい。

そうしたら、そのバカの家が火事で燃え、重ーい病気にかかった挙句、妻子に逃げられ、自分の会社は倒産。しかもしかも……いや、これ以上はかわいそうすぎる。とても私の口からはいえません。ご想像にお任せ致します。

……そんなことがあったため、「アイラ様の呪いじゃーー！！アイラ様の逆鱗に触れたのじゃーー！！」的な事態になり、「言い伝えは事実だったのじゃーー！！」となったわけで、バカが悲惨な人生を送ったのはアイラ様が怒ったからだ、となったらしい。ま、今ではそんなバカはいないらしいが。

いや、まあ、私もよくわかっていないので、こんな説明で分かるかしら不安ですが。

てか、アイラ様怖すぎだろ。慈悲の心はいずこだよ。まあ、アイラ様があそこに住んでんだったらキレるか。うん、キレるな。

はい、次！！

「〝知らせ〟のアイラ様は、聖地も乱すものを見つけると、涙を流す」

うん、どっかできいたよな話。

〝知らせ〟とは、マッオの中心にある広場にたっている金でできているアイラ像のことだとか。

フィニーさんは「精霊のご加護のおかげで〝知らせ〟は１０００年ピカピカです」とか言っていた。

で、バカがショベルカーらしきもので、（こっちのほうが科学技術が進んでいるので、聞いていればショベルカーより断然よさそうだったが）南の聖地を削ったとき、アイラ様の赤い目から赤い涙が流れたらしい。いや、アイラ様の目が赤いってどうよ。っていうと、フィニーさんは何を勘違いしたのか「大丈夫です。姫の目は黒いで

すが、その力はアイラ様そのもの。精霊様と会話ができるのも、女神でありアイラ様である、あなただからです」とか言っていた。

次ー！！

「姫が現れるとき、〝知らせ〟のアイラ様は微笑まれる」

姫、とは異世界から現れる精霊使いのこと。

今までには2人来たらしいが、精霊と話せなかったらしいし、チカラも中の上みたいな感じだったらしい。

ちなみに、フィニーさん曰く、私のチカラは上の上。

私は、姫であり、女神であり、アイラ様…とか言われました。いみふ。…あ、やめて、フィニーさん。

にしても、さっきもそうだったけど、像が泣いたり微笑むって……ある意味ホラー。

思わず口走ったら、フィニーさんに睨まれた。

う～ん、美人は怒ると怖いね～～～！！

でも、なにやら空気がバチバチ言いだしたので、笑えなくなったけど。

そして、次。

「〝知らせ〟のアイラ様がいなくなる。それが意味するのは、アイラ様が訪れる、伝説の女神が降臨なされるということ。南の聖地に姿をお見せに成られるであろう」

今日、広場にアイラ像がなかったらしく、民が「アイラ様が盗まれたーーー！！！！」と騒いでいたのを聞いた、セシフィーの王女様が「伝説のアイラ様の降臨だわ！！！！！！！！」と絶叫。で、王

女親衛隊の方々が態々南の聖地に駆けつけ、私を発見。なんちゅうこっちゃ。何気にアイラ像見たかったのになぁ。

で、次。

「女神は精霊の神。世界に祝福されるべき存在。万物の精霊と意思疎通を行い、万物の精霊を操り、又、精霊は女神のために生きる」

…チートか。
チートなのか自分。

「世界は女神によって、またとない繁栄を遂げるであろう。女神を疎かにした場合世界は滅びる」

いや、んなことしないですからね。
ちなみに、アイラ様はセシフィー国だけでなく、オールバーナイン全ての国で信仰されている神様らしいので、私はどこへ行っても優遇されるらしい。……ぐふふ……ふふふふふふ……ハッ！！
いやいや、おいしいもん食べれるーとか、イケメン王子ーとか、そんな変なことなんか考えてないんだからね！！！

で、言い伝えは一応終わり。
頭が痛いよ。

精霊についても説明を受けた。

風の精霊、シルフ。
音の精霊、フォーン。
水の精霊、ウンディーネ。
火の精霊、サラマンダー。
雷の精霊、マルト。
闇の精霊、アルプ。
光の精霊、ルクシティー。
愛の精霊、リャナンシー。
地の精霊、ノーム。
木の精霊、ドライアド。
力の精霊、ヴァルキリー。
花の精霊、フラワーフェアリー。

あと、破壊と再生の精霊がいるとされているが、見た者はおろか存在を感知した者や、その力を行使した者が過去に一人もいないことから、上に述べたような名前はついていないらしい。

「姫。マッオが見えてきました」

ふいに、フィニーさんが言った。

言い伝え（後書き）

またまたポイントが！！！！！
この幸せだけで、私一カ月生きていけます。
ありがとうございます。
まだまだ未熟者ですが、よろしくお願いします。

マッオにとうちゃーく（前書き）

これから、精霊の名前はカタカナになります。

マッオにとうちゃーく

「姫。マッオが見えてきました」

フィニーさんが窓に立ち、カーテンを開けた。
外の景色は、凄いスピードで後ろへ流れていく。

う～ん。科学の力に感動ねっ。

私は、フィニーさんの隣に立って、彼女が指差す方向に目を向ける。

「わぁ…っ」

思わず声が出た。

緑の草原に、場違いのように、それはあった。

昔、理科で天体の学習をしたときに見た透明半球のようなものの中に、所狭しとビルがそびえ立つ町が入っている。
透明半球は、朝日を浴びてキラキラと輝き、町はここからでも賑わっているのが分かる。

「これが、マッオ。セシフィーが誇るドーム型都市ですわ」

復活したステューシーが誇らしげに言った。
「すごーい！！何平方キロメートルあるの？？」
「８０００平方キロメートルですわ」

ということは、兵庫県ぐらいの広さだ。
「首都でそんなに広いって、すごいね～」
「首都、と言いましても、マッオがセシフィー国みたいなものです。マッオ以外の町は3つしかありませんし、それらは民族が住んでいるところでセシフィーからは孤立しています」
ふんふん。そう考えると、セシフィーは狭いのかもしれない。
人口密度高そうだなぁ…
なんて、物思いにふけっていると、フィニーさんが
「セシフィーにつきましたら、姫には、セシフィーの王に会っていただきます」
なんぞとぬかした。
「……はあ??」
「たっぷりの間、ありがとうございます。それでですね、姫。服装はそちらの破廉恥なものでよろしいのでしょうか」
そして、すこし、フィニーさんが頬を赤らめ、視線を逸らした。
……はれんち??
死語じゃねぇ??
と、私は自分の服装を確認する。
どこがハレンチ??
朝倉高校の立派なブレザーの制服でしてよ!!
朝倉高校の制服、可愛いって人気なんだから～。
わけわからん、とフィニーさんをみると、何度か咳払いされ、

「……そのように素足をお見せになるのは…ちょっと……」
と、言われた。
でも、スカート丈は、私、真面目な方よ。膝上１５？。
だって、普通にクラスの子はパンツ見えてたからね～。男子が五月蠅いったらない。お前ら一体何歳だっつうの。
って、そんなことを話してるんじゃなかったわね。
「長くした方がいい？？」
「……はい。」
こっくりと真顔で頷かれた。
双子にも、だ。

私が折っていたスカートを3回ぐらい元に戻すころには、もうマッオに着いていた。
あんなに離れていたのに、コアの速さ、尋常じゃない。

マッオには、５００階建てのビルが溢れ返っており、朝方だというのに、ライトが目に痛い。
賑やかすぎるくらい、賑やかなところだった。
なのに、私たちが乗っているコアが通るたび、町の人は口をつぐみ、目を見開いて興味深々といったようにこちらを見てくるので、かなり居心地が悪く、私は窓から景色を眺めるのをやめ、大人しく座っているしかなかった。

にしても、フィニーさん曰く髪や目が黒い人っていないらしいし、本物のアイラ様は目が赤いらしいから、私、「こんなのはアイラ様じゃない！！」とか言われて吊るし首とか焼き討ちとか毒殺とか絞首刑とか吊るし首とか焼き討ちとか毒殺とか絞首刑とか吊るし首とか焼き討ちとか毒殺とか絞首刑とか……絶対！！いやだぁぁ！！！！もしかしなくてもされないよね！？！？
フィニーさんも双子も私を騙してたりとか。あ、でも精霊さんから

そんな情報はきてないから、そこは大丈夫か。
でも、いきなし王と王妃と王女と謁見とか……はぁ……自信ないなぁ。
私は普通の女子高生なんだよ――――――！！！！！！！！！
――――――――――――――――ものすんごく、不安だ。

その頃町では――――――……

「アイラ様が降臨なされたらしいぞ」
「コアに乗られているらしいわ」
「きっと、見る目麗しいお方なのでしょうね」
「髪や目は黒いらしいよ」
「でも、力は本物なのでしょう」
「一度でいいから拝見したいわ」
「でも、あの王は――――…」
「言っちゃいけないわ、そんなこと」
「いいんだよ。王妃も王も、性格が悪い。まともなのは王女だけだ」
「そうよ。絶対アイラ様を見せてくれないわ」
「王のせいで、アイラ様の逆鱗に触れたら、世界は滅びるんだぞ」
「王が何も企んでいたりしませんように」
「セシフィーに平安を」
「アイラ様が愚王の手からセシフィーを守ってくださいますように」

愛羅の知らぬ間に、めっちゃ期待されていた。

ついたのに、何このgd gd感

注意していなければ気がつかないほど微弱に、コアがこてん、と揺れた。
「つきましたわ」
カーテンを少しめくり外を覗いていたモスキュートが微笑んで、嬉しそうに私を振り向く。
やっとか！！
私は顔を輝かせて立ち上がり、早く行こうぜ☆的にフィニーさんを見る。
フィニーさんは、頷いてコアの出口に立った。そして、重そうな扉を開いて降り、下から私に手を差し出す。
こういうのって、男の人がやるんじゃ……？？と首を傾げながらも、私はその手を取り、たんっとローファーの音を響かせながら、白いコンクリートのようなものに舗装された綺麗な道路に降り立った。
「うおっ？？」
途端、目に飛び込んできたのは長く長くそびえ立つ黒いビル。
異世界とかいうから、でっかいヨーロッパ風の城をイメージしていたため若干拍子抜けだ。
しかし、地上からでは、ビルの最上階は認識できないほど高く、外観は黒一色で塗装されており、窓は一切ないように思える。換気って大事なんだよー、なんて思う。
王に会いに来たわけだが、本当にここに王が住んでいるのか疑問に思い、私はフィニーさんに視線を移した。
「ここに王様が住んでんの？？ここが城？？」

フィニーさんはええ、と頷く。そして、少し顔を悲しげにゆがめ、
「一般的に此処は、国民を守る『城』という認識ではなく、『黒涙(こくるい)』などと呼ばれ、市民には畏怖の対象となっていますが」
と呟いた。
黒涙…畏怖…
不吉な響きだなぁ…なに仕出かしたんだよ、王。
私は今からここに入るというのに戦意喪失し、気力をなくしてしまった。
唇を尖らし、もう一度黒涙を見遣る。
確かに、でんっと目の前に立つそれに、少し、威圧感を感じる。何故か、来るものを拒んでいるような印象を受けなくもない。
やだなぁ…国民に愛されていない王族なんて、悪い人なんだ、きっと。
…いや！！！！ファイトよ愛羅！！！！ガッツで乗りきれ！！！！！
イエェェェエ！！！！！
自分で自分を奮い立たせ、私は一人でコクコクと頷いた。
いけ！！行くんだ！！
「よ、よし！！行こう！！さぁ、レッツゴーーーーー！！！！！！！！！！」
拳を振り上げ、双子とフィニーさんに叫んだ。
「そうですわね、早く行きましょう。私たちは姫様にお召し物を…」
ステューシーがフィニーさんに言えば、フィニーさんは
「それがいいです！！！！！」
と、何故か力みまくって、先ほどの私に負けないくらいの音量で叫んだ。
せっかくスカート戻したのに…！！
「その破廉恥なものは、やはり、やめたほうがいいと思っていました！！私が王に報告してきます！！さあ双子！！姫を上品なレディーに仕立て上げてきなさい！！」
俄然やる気のフィニーさんは声高に言って、一人なれた様子で黒涙

に飛び込んで行った。
「…あれ、なに…？？」
ちょっと、フィ二ーさんのキャラ掴みにくいぞ〜〜。
ステューシーは、私を見て儚げに微笑んだ。
「精霊使い様は、変人が多いのでございますわ」

…………私への侮辱か？？？？

数分後―――……
「やぁぁぁめぇぇぇてぇぇぇ！！！！」
私は豪奢な部屋の隅っこで、自分で自分の体を抱きしめて、いやだいやだと首を振っていた。
「「お願いです、姫様！！！！」」
双子が口を揃えて言う。
「絶ぇぇぇっ対に嫌！！！！！」
私は首をもげそうなくらい左右に振り回し、拒否する。
部屋に連れて来られた途端、二人は愛すべき朝倉高校のキュートな制服を私から剥がしやがった。つまり、今下着姿なのだ。
おう、のう。
ｍｙ ｏａｓｉｓーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
モスキュートに押さえつけられていた私は、泣く泣く制服とおさらばを告げる他なかった。
そしてそして、双子は、目がチカチカする衣装を私の前に広げたの

だ。思わず眩暈。あぁ、神様。
「姫様、早く来てくださいな、風邪をひかれますわ」
ステューシーが、真っ赤なサテンのドレスを目の前で揺らしながら涙目の私に催促する。
「嫌！！」
私はすぐさま即答。
「姫様〜…」
モスキュートが、理解できないいろいろなメイク道具を両手に沢山抱え、ステューシーの横で困ったように体を揺らす。
私は、じゃあ、と口を開く。
「もっとマシな色にして。紫とか茶色とか」
そんな真っ赤なぷりぷりドレスは死んでも御免被る！！！！！！！！！
「だめです！！！！」
「赤はアイラ様の象徴、神聖なるお色なのですわ！！！！」
なにそれーーーっっ！！！！！！
即答され、今度はこちらが困った。
「姫様、そう意地を張らないで…」
なだめるように言ったステューシーに、私は憤然と思う。
意地張ってんのはそっちよ！！
まったく頑固なんだから！！！！
自分も頑固だということには気が付いていない。

お着替えｗｗ

そうして、ギャンギャン言い合いをしているうちに、私の中にある思いが芽生えてきた。

――――――――――負けられない！！！！

今思えば、バカである。即刻やめろ、と伝えたい。でも、その時の私は、真面目に、双子に負けてたまるか！！と誓った。

「絶対にそれは着ないからね！！！！」

フンっと私は二人から顔を背けた。

私が洋服を着るんじゃなくて、洋服に着られるよ。

こんな地味顔は、服に負ける。無理だ。断固拒否だ。

「「そんなぁ…困りますぅ……王も待っていらっしゃるんですよぉ……」」

頼りない声が聞こえてきた。

「だから、別のを持って来てってば」

「「わがままをおっしゃらないで下さい！！」」

「むぅ…。まったく、頑固なんだから！！」

「「それは姫様です！！！！」」

「人を頑固呼ばわりするなんて、なんて失礼なの！！」

「「姫様がしたんです！！！！」」

ムキーッと歯をむく双子。

お――――！！怖い怖い。

でも、ふざけてばっかりもいられなくなってきた。

そう、双子は強行手段に出たのだ。

がしり、と腕を掴まれた。

げ！

赤いドレスがチラチラと揺れ、私に迫ってくる。

ドレスが広がって、私に被さろうとしている。
やばいよ！！！！ピンチだよ！！
真っ赤っかなドレスを着せられちゃうよ！！！！
どうする愛羅？！？！
軽くパニックになった私の耳に、
―――――――ゴンゴン！！
と苛立ったようなノックの音が入ってきた。
私たちは言い合いを一旦やめて、そちらを見遣る。
おおう！！！！
救いの女神！！！！

「ユースだ。入ってもよいか」

低い声。こちらもノックと同じく苛立っているようだ。
女神じゃなく勇者だったかぁ…まぁいい。救ってくれたのに変わりはない！！！！
「ど～～～ぞ！！！！！！！！！！！！！！！」
私は救世主に、大声で返事をした。
双子がギョッと私を見る。
「？」
ドアがバンッと音を立てて開いた。そこに立っていたのは、茶色の目と髪をした若い男の人。黒い布を腰に巻き、兵隊さんみたいな格好だ。またまたイケメン。――――おお！！！！俄然ＴＥＮＳＩＯＮが上がった私は、ふと、彼が目を見開いて固まっているのが見えた。
なぜ、固まってんの？？
私はコテンと首を傾げた。
すると、彼が口だけを動かし、
「貴女は露出狂か」

と呟いた。

ＷＨＡＴ？？？？

私は、グギギ…っとぎこちない動きで自分の体見た。
目に映る、コバルトブルーの水玉下着。
――――――――――ＮＯーーーーーーー！！！！！！
！！！！！！！！！！！！！！！
私の頭の中で、カ――ン！！と終わりのコングが鳴り響いた。
その時、聞こえた精霊の声。
〝女神の裸体を拝むとは何たる謀反！！！！！！〟
〝丸焼きにしてくれるわ！！！！〟
サラマンダーが、私の右で叫ぶ。
左では、ウンディーネが現れた。
〝愛羅様の素晴らしい綺麗なお肌は私たちだけのもの！！！！〟
〝溺死しやがれ～～！！！！！〟
同時に、両側で炎と水が発生し、凄まじい勢いでユースさんに向って行く。
彼は、何が起きたか分からない様子で、立ち呆けている。
私は、目をつむった。
が――――……

〝またあんたらか！！〟
〝うちらが抹殺すんねん！！〟
〝ひっこんどき！！〟

〝ま～たあんたたちなの？！〟
〝ここは安心して私たちに任せなさい！！〟
〝あんたたちが出る幕なんてないわ！！〟

〝言ったな！！〟

〝言ったわよ！！〟

様子が違う。
目を開ければ、ユースさんにぶつかる前に、炎と水が衝突しあい、蒸発していた。
「おいおいおい……」

〝いい加減にしなさい、ガキ〟
〝本当に火と水は仲が悪いのね〟
〝まずは不届き者を退治してからでしょう〟
〝さっさとやれよ、バカども〟

これは、シルフ。若干中傷が入っている。が、水と火の精霊は我に返り、ユースさんに意識を移した。
――――――――げ！！！！やばい！！！！！
私は慌てて呼びかける。
《待って待って待って！！！！落ち着いて～～～！！！！私がどうぞって言っちゃったせいなの～～！！！！》
〝むう…〟

〝でもでも、私たちの愛羅様なのにぃ…〟
〝……まったく。命拾いをしたわね、人間〟
〝ここは愛羅様に免じて許してやるよ〟
〝しょうがないなぁ…〟
〝ほな、帰ろか〜〜〟
何もなかったかのように、静まり返る部屋。
ユースさんは、腰を抜かしてへなへなと座り込み、隣を見れば、双子が気を失って倒れていた。
――――――――どうしよ。
そして、ハッと閃いた。
今のうちにドレスを変えよう!!!!
――――――ユースさんをまたいで部屋を飛び出す私には、人間の感情はないらしかった。

聖夜（前書き）

上原聖夜のお話です。
若干ネタばれがあるかも

聖夜

ザクザクザク……

草を踏みしめる。
右手には落ちてたちょうどいい太さと長さの枝を持ち、暑くなってきたので制服のブレザーを引っかけている。
「まじだるい…っ」
はぁ…っと溜め息をはいて、シャツの袖で額の汗を拭う。
どれくらい歩いてきたのか、見当もつかない。
疲労も祟って、口調が真面目。
木の杖があっても脚は震え、立っていることすらままならなくなってきた。
制服はあちこちの木に破られ、泥が付着している。
もうボロボロだ。
見たこともない変なウサギもどきとか、オオカミもどきが夜な夜な襲ってくるし、うかうか寝てもいられない。
はぁ…っと、また溜め息。
だいたい、ここはどこなんだ。
鬱蒼と茂る森は、俺を拒み圧迫しているようにも思える。
ときどき、ざわざわと揺れ、俺に出て行けと催促するのだ。

「もう、無理だろ…」

もう、どうにでもなればいい。
俺は、絶対に、あの時に死んでいるんだ。
今更惜しい、という気にもならない。
ただ、気がかりなのは、愛羅がこんな目に遭ってないかということだけだ。

ん〜、でもアイツは根性が心臓に毛が生えてそうなくらい図太いから、まぁ大丈夫かもな。
そう思ったら、体から力が抜け、思わず地面に倒れこんだ。
仰向けになり、目を閉じる。
汗が風に仰がれ、涼しい。
このまま、消えてなくなってしまえたら楽なのにな……。

ふと、人の話し声と足音で目が覚めた。
どれくらい経ったのだろうか。
辺りはもう薄暗い。

――――――――――――――俺、生きてたのかよ。

寝ている間に怪物にでも食われてしまえばいい、と思っていたため、がっくりときた。
「～～～～～～～～～～～～～～～」
「～～～～～」
しかも、話し声は、聞いたことのない言葉だし。
そこで、俺の脳裏を掠めたのは〝異世界トリップ〟だった。
うわぁ……このバカな俺が、異世界語がわかるわけねぇ…！！！！
俺は上半身を起こし、声のした方に振り向いた。

「………え〟？？」

だいだい色の髪にエメラルドグリーン目の勝気な美少女が目を見開いてこっちを凝視していた。

完っ全、異世界だよ…。
てか、このタイミングで美少女とご対面とか、王道じゃね？？

と、思ったのもつかの間、次の瞬間には美少女の後ろから出てきた茶髪に黄色い目のイケメンさんに銃的な、レーザービームだしそうな代物を突き付けられていた。
――――――――やばくねぇ？？？？
言葉通じないのにーーーーっっっ！！！！！！！！！
「待て、早まるな、落ち着け」
手を上にあげ、反抗する気はないことをアピールする。

「俺、無罪！！何もしてない！！！！お助けぇぇぇぇ！！！！！！！！」
そう叫んでみれば、男の敵であるイケメン野郎は、これまた綺麗な眉をひそめやがった。
おめぇがそんな顔したら、俺の汚い顔を軽蔑されているような気になる。
ああ、やはり、イケメンは存在しちゃいけねぇよな、うん。
「〜〜〜〜〜！！」
美少女がなにやら叫ぶと、イケメンは銃をおろした。
その途端、美少女は走り寄ってきて俺に抱きつき――――――……

――――――――――――――――――――うえ？！

唇に当たる、やわらかい感触。

茫然と固まる俺に、美少女はツインテールの髪を揺らしながら、にっこりほほ笑んだ。

「貴方は私のものよ」

――――――――――――――――――――何故、言葉が通じている？？

女って一体

私は、黒い石でできた長い廊下をどんどこ走っていた。――――下着姿で。
両側に数え切れないほどの扉があるが、精霊が教えてくれているのか、私は何故か洋服が収納されている部屋を知っていたため、迷わず走り続ける。――――下着姿で。
奇跡的なことに、私が廊下を下着姿で走っている間誰とも遭遇しなかった。
神は私の味方だ！！
フハハハハ！！
ひとしきり下着姿で笑ってから、気がついた。――――下着姿で。

この世界の神は‘アイラ’じゃね？

てことは、私神！？
なんて考えながら廊下を下着姿で走っていると、どうやら服が収納されていると思しき部屋に辿り着いた。――――下着姿で。

くどいようだが、下着姿で。
下着下着うっさいねん！！とおっしゃった方。
説明しよう！！！！！
何故下着姿だなんて言葉を連呼しているかと言うと、勿論、もう二度と、自分が下着姿であるということを忘れないためなのだ。あの悪夢を起こしてはならない。精霊が毒舌吐く、ブチぎれる。私のためにも相手のためにも忘れてはならないのだ。まあ、下着姿を見てしまうかはまた別の問題だが。
「まあ、いっか」

私は扉に向かって呟く。
たしか、扉を開くための合い言葉は――…
またまた精霊の力を借りて、脳の中から合い言葉を見つけ出した。
「……シャーロック・ホームズ」
……。
……シャーロック・ホームズぅぅぅぅぅぅ！？！？！？
おかしい。
おかしいだろう。
何故この世界に'シャーロック・ホームズ'が？
てか、何故これを合い言葉にした？

そのとき、静かにドアがスライドした。
「開いたんだし、まあ、いっか」
一人頷いて、気楽に部屋に踏み込んだ。勿論――――下着姿で。
「うぉ～。金かかってまんなぁ～」
すこし足を踏み入れれば、そこには、ところ狭しと大量の服が吊り下げられ、服を押しのけて行かないと、奥に行けそうにもなかった。服、というか、ドレス。でも、種類豊富で、派手なものからシンプルなものまで、色の種類もたくさんあった。
これだけあるのならば、私好みなものもきっとあるに違いない。……いつまでかかるかは分からないが。
私は腰に手をあて、部屋を眺め回した。下着姿で。
千着は確実あるよな…。
この中から着れそうなやつを一着一着調べるなんて面倒臭い。しかも、下着姿でずっといるなんて、多少乙女のプライドというか誇りというか…まあ、あれこれが傷つく。

ということで…

「精霊に頼んじゃえっ」

私は目を閉じて、精霊に念じてみた。

《精霊さーん!!いる〜?いたら私に似合う服を探してほしいんだけどなぁ》

しかし――…

「あれ?」

返事が、ない。

というか、さっきまで感じていた精霊の気配がしない。

「精霊さん?」

いないなら、しゃあない。私は申し訳ないながらも少し落胆しながら、服を押し分けて一人で着れそうなのを探すことにした。

――まさか、このとき、あんな計画が着々と進められていたとも知らず。

――精霊の気配が感じられないことを、もっと深刻に考えるべきだったとも知らず。

「ったく、誰が使うわけ!?こんなに大量のドレス!!」

ぐいぐいドレスをかき分けかき分け、私はもう嫌になってきた。下着姿で。

いくら探しても、プリプリピラピラなのだ。地味な色のは露出度が高いし、この世界にはマトモな精神の人はいないんではないだろうか。自分が下着姿で廊下を駆けずり回ったことは棚に上げ、私は溜め息を吐いた。

私はもう嫌だと呟く。下着姿で。

「あ〝ー！！もうっ！！」
ジャッと最後の洋服の山を押し分けたとき――…
私はこちらを怯えたように見つめる女の子とばったり出くわした。
――――下着姿で。

――――二人とも、だ。

「きゃーーーっっ！！！！無礼者ーっ！！」

……あれ？
これ、私が悪いのか？

女って一体（後書き）

はい、謎の女の子登場！！わら

王女

さて、問題

私は変態でしょうか？
それも、同性の下着姿を見て喜ぶような

答え

もちろん、ＮＯだ。
少なくとも、私にＧＬの趣味はありません

はい、またもや問題
ここで私は無礼者だと悲鳴を上げられましたが、どうしたらいいのでしょうか

答え

解なし

「無礼者て…」

このご時世滅多に聞かないですけれど。
私は苦笑いして、彼女に近づく。対して、彼女はビクッと後ずさった。
背は私と同じくらいか、もしくは低いくらいで、水色の髪の毛に碧眼。年も同じくらいだと思う。
てゆうか、めっちゃ美少女だ。
彼女は、怖がりながらも私を涙目で睨む。
あんらぁ～、睨んでも、またまたこれも可愛らしいお顔で…
でも、待って。あんただけじゃないからね？私も下着姿なんだからね？
にしても…羨ましいプロポーション。
彼女は私が凝視していることに気がついたらしく、自分の体をバッと抱きしめた。
「…あ、あなた、誰ですか？何故ここに入れたのです？」
掠れた声で、私に問う。
「なんでって…シャーロック・ホームズって言ったからでしょうに」
当たり前だろう、とそう言うと、美少女は綺麗な眉をひそめて私に怒鳴った。
「ですから！！何故その言葉をご存知なのかと申しているのです！！わたくしは！！」
おおぅ。美少女がキレると怖いなぁ。
「なんでって…言われましても…」
これは…言っちゃってもいいのか？精霊に教えてもらいました、って言って精神異常者だと思われないか？それより、私が愛羅だとバラしてもいいのか？てか、こいつは誰だ？
「あなたは誰？」
聞くことにしました。
教えてくれないかなぁと思っていたけど、彼女の頭は単純にできているらしく口を開いた。

「ミリアスク…」

そして、ミリアスクは言ってから、ハッとした。
「ち、違います！！違いますわ！！あ、あなたこそ誰ですの！！先になのっ、名乗るのがマナーですわ！！」
「……そこ、噛んじゃだめでしょ…」
「〜〜〜っ！！ミリアスク！！ミリアスク・ウィング・セシフィーです！！」
真っ赤になったミリアスクは、やけくそのように叫んだ。
おぅ…。意地になりながらも赤くなって恥じらう美少女……なかなかいいもんだのぅ…ふむふむ。
専ら変態オヤジの目線で、私は顎に手をあて、うんうん頷く。
聖夜がいたら、真っ先にテンション上がるんだろうなぁ……あの変態め。
……待てよ。
今この人なんつった？

『ミリアスク・ウィング・セシフィー』

……セシフィー？
ここはセシフィー国。
国の名前が苗字ってことは？
…ま、まさか、この人…

「王女ッッッ！？！？！？！？！？」

悲鳴みたいな声がでた。

わわわわわ…どうしよう。この美少女絶対王女だよ！！私敬語も使

わず、絶対生意気だったよ！！あぁ～っ！！晒し首だ吊し首だ毒殺だぁあ！！
いや、今からでも遅くないはず。名誉挽回。よし、いけ愛羅！！
「私は上杉愛羅です！！Ｈｅｌｌｏ，ｐｒｉｎｃｅｓｓ！！」
やあ、と片手を挙げ、ＨＡＨＡＨＡと笑ってみせる。
王女の表情は瞬時に明るくなり、パァ…ッと辺りに花を散らした（ように見えた）。

「…――！アイラ！…！！アイラ様なのですね！？」

そして、王女は警戒的だった雰囲気を全くなくし、嬉しそう、というか、かなりの期待が混じった目線を私に送ってきた。うりゅっと、碧い瞳が潤む。
「――アイラ様！！お待ちしておりましたわ」
そして、なんと私にギュッと抱きついてきた。もちろん、下着姿だ。
ちょっとヤバいよ～っ！？
なんだか、抱きつかれてるこっちが恥ずかしいっ。
待て待て待て！！

「……ごめん、私にそっちの趣味はない」

そう言ったら、王女はハッとしたように私から体を離し、またもや真っ赤になった。
「あっ、え、ご、ごめんなさいっ…その…私にもそんな趣味はありません…」
真っ赤になったまま俯いて、恥ずかしそうにもじもじするもんだから、私まで頬が熱くなってきた。
「…いや、いやいやいや、私こそなんか王女様に失礼な態度をとりましたし…」
女二人、下着姿で真っ赤になっている様子はかなり異様に違いない。

すると、王女は私を見て首を振った。
「いえ、私こそお父様の使いの者かとアイラ様に警戒心を抱き、申し訳ありませんでした。
それに、アイラ様は誰にも敬意を示す必要はありません。アイラ様は誰にも従わなくていいし、誰の下にもいないんです。この世界では、アイラ様が支配者です。アイラ様が正しいのです。アイラ様は我らの神…。アイラ様こそが、我らを救って下さる……」
……いきなり、なんのフラグですか、これ。
お約束の捨て駒勇者？

「――アイラ様――…」

王女が真剣な顔で、私を見据えた途端――…

「「姫様ぁぁぁぁあ！！！！」」

双子の泣き声と、慌てたような足音が響き渡ったのだった。

双子、復活したんだな（＊'―'）

って、駄目だ！！
「うちら今下着！！！！」
王女に訴えると、彼女も我に返り、自分が選んでいた着るドレス候補の中から一着手渡してきた。
シンプルだけど、地味過ぎず。可愛んだけど、媚びてるぶりっこ感

はない。いい趣味してるっ。ようやく、まともな人発見だ。
まあ、そんなにこっちの世界来てから知り合ってないけどさ。
王女が着ているものも、デザインがとても可愛かった。
その途端、

「「愛羅様ぁぁぁぁあ！！！！！！」」

また泣き声。
私と王女はビクッとした後、急いでお互いの背中のチャックを締め合い、ホッとしたように笑いあったのだった。

あぁ…まだここに来て1日も経っていないのに、なんだか、疲れました、私。

謁見

可愛いスミレ色のドレスの端をつまみ上げて、先程双子に教えられた' お辞儀' のポーズをとる。

――――あぁ、ほんとなんなのこの体制。まじ拷問。

左足を後ろへ真っ直ぐ伸ばし、右足は直角に折り曲げ、礼をする腰の角度は４５ 。。

そしてなんと言っても、一番耐えられないのは、目の前に、私を足の先から頭のてっぺんまで品定めでもするかのようにねっとりと眺め回す、眉をひそめた厳つい顔したおっさんがいること。

なんだか、性格悪いのが滲み出てる感じで、もう最悪。私を見る顔が、かなり失礼、ありえない。これでも私乙女よ、ガラスのハートよ。

ジジイは大きなキンキラキンの玉座に座り、偉そうにふんぞり返って高いところから私を見下ろしている。そして、無粋な目を私に向けながら、手に顎をのせて、時折、伸ばしたチリチリのヒゲを触る。じろじろ見てんじゃねぇよっ！！と怒鳴りつけたいのを、力を入れてこらえる。何てったって、相手は王様。

王女は、私が誰にも従わなくていい的なことを言っていたけど、今、私の居場所はここしかない。ならば、私はこのムカつくジジイに頼らなければならず、少しでも媚びを売る必要があった。

「…娘、本当はアイラではないだろう。知らせを盗み、取り入ろうと来たのだろう」

ふてぶてしく私を見る王。

――――…はあ？

アイラ像を盗んだ？
なんのために？
誰が？
私が？
取り入る？
誰に？
このジジイに？
しかも、尋ねるわけでもなく、何故私に確認してんだよ。どこにそんな根拠が？Ｗｈｅｒｅ　ｉｓ　ＫＯＮＫＹＯ？

けれど私は、にこやかにほほえみ返す。

「ははは っ。私は死んでいるので、ここに居場所がほしいだけですし、だいたい取り入るも何も反論の余地なく私はここに連れてこられただけですので」
すると、
「では、精霊のチカラをみせてみろ」
王様はニヤリと、気味悪く黄ばんだ歯を見せた。
そのとき、

〝…だ…め……だまさ…れちゃ…め…〟
〝…わた…したち……ふうじら…れて……ひめの…ねが…いきけない……〟
〝……そばに…いる……のに……〟
〝…でも……あいつらの……チカラ…よわい…〟
〝だ…から…今…姫に話しかけ…れる…〟
〝……だんだん…戻ってくる……〟
〝…でも…騙されないで…〟
〝あれもこれも…ヒトの王の意志…〟
〝…騙されないで……〟

――――え？

途切れ途切れに聞こえた精霊の声。でも、私はなんとか把握した。

『精霊は、こいつに封じられている』

――――こんのジジイ…。

私は、お辞儀なんかスッパリ止めて立ち上がり、王に対抗するかのように腕組みをした。

「おい、腐れ。私は騙されねぇぞ」

「……何だと？」

「精霊を返せよ」

「な、なにを根拠に…」

「根拠？はっ、フィニーさんに精霊のチカラを使わせてみなよ。つかえるかな？ねぇ？」

私はフィニーさんに目線を向ける。フィニーさんは泣きそうな顔になった。

「もうしわけありません！！！！」

ガバッと頭を下げた。

――――ん？

「アイラ様から精霊を退けたのは私でございます！！お許しください！！」

え？フィニーさんが？？
まさか、と王を見ると、驚愕の顔つきをしていた。
リャナンシーが呆れた口調で言う。

〝ばかばか。あの顔見た？？〟
〝裏切られちゃったね～〟
〝私たちをよけたのは、あの女だけど〟
〝命令したのは人の王〟

……あ～。そういうこと。

「ふ～ん。ねえ王様。そんなこと命令するなんてほんと幻滅なんだけど。言い訳なら聞いてやる、さあどうぞ」
私はジジイに向かって、挑発的に口角を上げてみせた。戻りかけなのか、霧のように曖昧な姿をしたサラマンダーが、私の横でバチバチと火花を飛ばして威嚇する。
すると、

「すまない！！許してくれ！！」

王にいきなり頭を下げられた。

「…はあ？」

「すまなかった、アイラ様！！許してほしい！！」

この態度の変わりように、唖然とした。

「昔から、アイラ様を偽った輩が来るのだ！！すまない！あなたは本物だ！！」

必死に土下座する王に、すこし違和感を感じる。
しかし、
「……なんじゃそりゃ」
額を床にこすりつける一国の王を目の前にして、火の玉ぶつけてやろうなどと外道なことを企むほど、私も鬼ではない。
私はぎこちなく微笑んだ。

「……許す」

大袈裟なリアクションで嬉しさを表現する王の隣では、王女が眉をひそめて立っていた。

＊　＊　＊

〝愛羅様ったら、優しい〟
〝…王が言ってること、ほんとうはどうだかわかったもんじゃないわ〟
〝でも、愛羅様が許したのなら、私たちが口出すことじゃないわね…〟

この世界で初めての就寝（前書き）

遅れました！

どころか1年ぶりの更新！

すみません！

読んでいただけると嬉しいです。

この世界で初めての就寝

バタンとでっかい扉が閉じられた。誰もいないことを確認して、深いため息を吐く。

ああー。

マジ疲れた。

肩から力が抜けたのがわかる。

何だ、あの王様。ただの嫌な上司じゃねえか。そんなキャラいらねえよ。そんな立ち位置いらねえよ。

しかも、王ってあんなに簡単に頭下げていいのか？言っときますけど、私、世界滅ぼしたりとかしないんで。

てか、あんなキモイのが王とか信じたくない。有り得ない。頼りない。

……って、ん？

あれが王で、王女が王女なら、え、それはもしかして、父と娘ってこと？

そこまで考えが至った私は、思わず手のひらで口を抑えた。

あれと、あのかわゆいミリアスクが親子とか…っ！

ないっ！ないよ！

なんて純粋に育てられたのだろう、ミリアスクよ。良かった。ちょっと、アイラ様信仰が強すぎるっちゃあ強すぎるけど、いい子に育ってくれて、良かった。心の底から良かった。

まさに、鳶（トンビ）が一鷹を産むってやつだな……あれ、鷲（ワシ）だっけ？鳶でしょ？

「アイラ様っ」

国語の勉強が、こんなところで入り用になるとは…と落ち込んでいると、可愛い声がした。
そちらを見れば、声同様可愛く笑って、かけよってくる王女さま。
もし私が男なら、両手を広げて泣いて喜ぶほどの光景だ。

「王女ー」

やあ、と片腕を上げて、私はかっこよく笑ってみせる。可愛いのう。可愛いのう。あんなこと考えていたものだから、ちょい、保護者的視線も入る。

が、王女は少し顔をひきつらせて立ち止まった。
――――はっ！
気に入らなかった！？　ニヒルな愛羅ちゃんは気に入らなかったかい！？！？
王女はそのまま頭を勢いよく下げた。

「先程は、父が失礼いたしました！本当に申し訳ありません」

「いやいや、王女が謝ることないっしょ！」

「父の失態は、この国の失態です。お詫びにわたくしが、」

わ、わ、わたくしが！？

なんでもするとか言っちゃう系！？
うわ、美少女とドキドキ課外授業…ってををい自分！
しっかり！しっかりするんだ！

「いやいやいや！そんな簡単に自分を捨てちゃダメだよ！！自分を大切に、ね？大切にしてっ」

悲鳴のように叫んだ私に、王女は一瞬何の話だと言うように、きょとんとした表情をしたが、すぐにふわりと笑った。

「はい、ありがとうございます。大切にします。　ですが…、それとは話が別です。なんとお詫び申し上げればいいのか…」

「お詫びなんていらないって。私、国を滅ぼしたりなんてしないから安心してよ」

困ったように笑えば、王女は渋々納得したように頷いた。

「アイラ様は本当にお優しいのですね」

しみじみと言われ、困ってしまった。『アイラ様』か。

王女は、パンと手を叩いて楽しそうに言う。

「それでは！アイラ様に泊まっていただく部屋にご案内いたしますわ！」

うむ。
それはうれしいぞ！

「こちらの世界についてから、お休みになられていません。おつかれでしょう」

確かに、今日はなれないこと続きだし、騒がしかったし（主に私が）、疲れたかも。

疲れを認識すると、一気に体が重くなった気がした。おまけに睡魔も襲ってくる。

慌てて、長い廊下を歩いていく王女の後を追う。

先程までは全く気にならなかったけれど（というか、下着姿で廊下を激走したり、王に会う緊張で周りを気にする余裕がなかった）黒涙は見れば見るほど、私が思っている異世界の城というイメージとかけ離れている。

外壁だけじゃなく。

廊下もまっくろ。

内壁もまっくろ。

花瓶とか絵画などの装飾品は全く見受けられない。

悪趣味な置物などが並べたくられているよかマシか。

きょろきょろしながら、王女の後を歩く。

案内されたのは、壁紙がピンクの……。いや、間違った。全部がピンク一色の部屋だった。

ヤバいぞ。え、うそ。

私にここで暮らせと？

こんな天蓋がついてるようなピンクベッドで寝ろと？

窒息死する。

確実に窒息死する…っ！

「本当は、アイラ様のお部屋は神聖なる赤色にしたかったのですが、流石に部屋が赤色ばかりだと落ち着かないかと思い、桃色にさせていただきました」

カラカラと、部屋の窓を優雅に開けながら、微笑む王女はそれはそれは可愛かったけれど、いやしかし、それとこれとは話が別だ。私は、先程から入り口に突っ立ったまま、一歩も部屋の中に踏み込むことができないでいた。

う、嘘だ。

こんな乙女全開の、ヤワワファン…っとした部屋に住んだら、肌がイエローからピンクになっちまうよ！脳内花畑になっちまうよ！

「この部屋には、バスルームもトイレもありますので、ごゆっくりなさってください」

なんて、素晴らしい設備なんだ。流石、城。……じゃなくて！

「いや、むり！むりむりむり！ごゆっくりできねえよ、この環境じゃ！」

否定すると、ガビーンとショックを受けた様子の王女。

――――はっ！

いかん！いかんぞ自分！

美形は悲しませてはならん！

美形は世の宝！

いえす、ｓｈｅはダイアモンド！

「うそ！ごめん！冗談！

じゃ、私寝るよ！」

ヒラ、と片手を上げると、王女は、安心したような表情になった。

「はい、おやすみなさいませ。ご用がありましたら、こちらのボタンを押して下さい」

これまたピンクのバラ型ボタンを指し示して、王女は部屋から出て行った。

……自分。

何やってんだ。

言えよ！桃色部屋にゃ住めないって！

私が一番ヤワワワァァン…っだよ！

しかし、ベッドにダイヴすると、直ぐにまぶたが重くなり。

私は爆睡していたようだ。

ピンク中毒、桃色空気による窒息死には至らなかったようです。

「てめえ、何してんだよ？」

最大限声を低くして言い、俺はすぐさまヤツから距離をとった。
いきなり唇を奪った変態に、優しくできるほど俺は出来た人間じゃない。

「あ、つい」

自分でも、びっくりしたかのように唇を押さえる変態に、俺はますます眉をひそめた。
つい、だと？
私のもの～とかほざいたのも、ついって？
美人だったら、何しても許されるとか思ってんじゃねえぞ。
あと、そこのイケメンもな！
顔がよければ、人に銃向けてもいいなんて法律はないんだぞ！

「でも、言葉は伝わったでしょ」

ふふふ、と笑う変態。髪の毛が、そよそよとたなびいた。いや、変態のくせに可愛いとか……って、え？

…なぜ？

なんで、それがわかったんだ？

そうだ。それに、なんで言葉がいきなり伝わるようになったんだ？

……変態のくせに。

図星でムスッとした表情になった俺に、変態は自分の髪を一束目の前に持ち上げてみせた。

暗いのでよくわからないが、だいだい色である。

「髪の毛が赤っぽいのはね、精霊の力がある証拠なの。でも、私の力はそれほど強くないから、私の唾液を媒介にして、あなたに音の精霊（フォーン）の加護を与えさせてもらった。

まあ、そうとはいえ、いきなりキスしたこと謝る」

……な…なん…だ…と……？

そんな深い理由があったのか！

変態とか言ってごめん、変態（未定）！

俺は素直に頭を下げて、フレンドリーの証であるスマイルを浮かべた。

「それは…知らなかった。ごめん。ありがとう」

すると、変態（未定）は少しどや顔をした後、ちょっと決まりが悪

いような表情になった。

「…まあ、私が勝手にしたことだし、それに、…あの……あなたと言葉を交わせたら面白そうだなと思ったから、つい……」

変態（保留）は、横を向いて怒ったように呟いた。

おい。だから、何だその' つい' って。素直に感謝した俺の気持ちを返せ。

じとーん、とした目で変態（保留）を見やると、慌てたように言葉を続ける。

「ね、ねえ、これから行くところあるの？」

まあ、ぶっちゃけ、ない、んだよな…。

鋭いとこ突いてくるな、変態（保留）。

「……」

「……な、ないなら、私のとこへ来ない？衣食住、すべて保証するわ」

……変態（決定）だ。

懐柔して、俺を…

……まさか、俺を…

手篭めにしようと…っ！？！？

「お、俺はそんなに安くないぞっ！？」

「……一体何を考えてんだよ」

呆れ顔の変態（決定）。

「撃つぞ」

いきなりしゃべったイケメンに焦る。

「それだけはやめてください」

まだ死にたくないっす。

「……こんなとこいたら、ほんと死ぬよ？ね、私けっこうお金持ちなの。一人くらい、平気よ」

にこり、と優しく変態（決定？）は笑う。

そして、次の瞬間――――

耳を疑う発言をした。

「ね、どう？勇者さま」

……ゆうしゃ？

ぽかん、とした俺に。

「黒髪黒目の異世界の勇者さま。私の国に来て下さい」

「え？ちょ、待てって。勇者て何だよ？」

「あなたのことよ？」

とぼけた顔をする変人（変態から格下げ）に、俺は、この世界で初めての知り合いである彼女を、何故か心底殴り飛ばしたい気持ちに駆られた。

ｅｐｉｓｏｄｅ．叫声（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！

これから、また更新を頑張っていきたいと思います。
ですが、書き始めからの時間があまりにも空いているため、今まで
と話の書き方が違うかもしれません。

これは、エピソードですので大丈夫だとは思いますが、少しこの話
の書き方がわからなくなっています。”はじまり”のノリに近づけ
れるよう努力しますが、ご了承下さい。

episode. 叫声

――――　やめて。

目の前が、赤く染まる。
暴れている。
赤い悪魔が暴れている。

何が起こってるの？
どうして？
なんで？
あんたは笑ってるの？
何故こんなことができるの？
なんで。

……やめてよ。

やめてよ！

聞きたくない。聞きたくない。
何も、聞きたくない。
やめて。呼ばないで。
できない。聞きたくない。

いやだ！！！！！！！
助けて！！！！！！！
誰か！！！！！！！

ああ。
……ああ。

でも。違う。

【私】にはできない！！

すべてが、赤く染まった。

『大丈夫だよ』

まぶたの裏で、ふわりと名前を呼んだのは、誰だっただろう？

違和と平和（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！

今回かなり少なめです。
すみません！

しかも、エロ目線入ってます↑

違和と平和

「おはようございます、アイラ様」

涼やかな声に、パチリと目を開けた。

目覚めがいい自分とか、気持ち悪いな。１８年生きてきて、朝一発で目が冴えたのは、初めてかもしれない。低血圧のこの私、自信を持って言える。

だけど、とても頭が重い。

なんだろ。昨日、慣れないことばかりで無理しちゃったのかな。しんどい。気持ち悪い。吐きそうだ。

もぞもぞと布団から這い出ると、頭の重さは次第にガンガンと、締め付けるようなものに変わった。

何か、頭から、吐き気のような感覚がする。何かが、私の中から出て行く感覚がする。こみ上げる違和感、不快感。

とめどなく波打つ『それ』が、頭を、私を襲っている。

眩暈が激しくなっていき、景色がモノクロになった。

気分が悪い。

何、これ。
嫌だ。
苦しい。
吐き出したい。
気持ち悪い。
出したい。
　たい。

くらくら、と視界が揺れて、一気に高まった『それ』が、言いようのない身体の震えと共に、『外』に吐き出されようとした時――

”　”

ぽたり。　と。

『それ』は収まった。

何が起こったのか、わからずきょとん、と固まる。

「ん？」

先ほどの気持ち悪さは、カケラすらない。逆に気持ち悪いほど、ぱたりと止まった違和感に、空虚すら感じる。

「どうかされましたか？」

ハッと顔を上げれば、心配そうにこちらを伺う王女の姿。

「顔色がよろしくないようです」

そう言い、ベッドに腰掛ける彼女に、私は慌てて否定した。

「いや、もう大丈夫！一瞬だけ気分が悪かっただけだから」

安心させるように微笑めば、心配そうな表情を少し緩めて、カートに準備されていたティーカップを差し出してきた。ふわっと、紅茶のようないい匂いが漂ってきて思わず口元が上がる。

「…どうぞ。少しでも、ましになればいいのですけど」

ありがとう、と受け取ると、王女が膝の上で重ねた自分の手をギュッと握りしめるのが見えた。

どうかしたのか。首を傾げると、王女らしくない思い詰めたような声が、そこから押し出された。

「やっぱり、寂しいですか？」

……ん？

「え？　何が？」

「……アイラ様は…今、…世界でひとりだけ……ぁ、いえ、なんでもありません。　では、タオルはここにおいておきますので、洗顔しておいて下さい。朝ご飯を、向かいの部屋でお待ちしております」

ぺこり、とお辞儀をして、王女は禁句でも言ったかのように口を押さえて、慌ただしく部屋を出て行く。

世界でひとり？
なんのことだろう。

首を傾げて、手の中のカップを見つめる。

……ま、いっか。

寂しいわけないし。
こうして住むところも食べ物を着るものさえ与えてもらえて、何一つ不自由していない。
精霊が、いつでもそばにいる。
王女もフィニーさんも双子もいる。
そんな私の。一体どこが。

―――　寂しい？

そんな言葉、全く私に相応しくない。

頭が少しだけ、キシ…と音を立てたような気がした。

ぞわりとした不快感が舞い戻ってくる気配がしたので、思考を停止し、カップの中の液体を飲み干した。レモンティーのようなさっぱりとした味のそれに、ほっとする。

洗顔をして、顔を上げた先の鏡に映る黒髪黒目に、この世界にはないその色に、懐かしい気持ちと同時、何故か虚無感を感じた。人知れず、ため息が漏れるのを他人事のように聞いて、もう一度鏡に映る自分を見れば、そこに揺れる空気を見た。

「おはよう、リャナンシー」

”愛羅様。忘れる？”

「…何を？」

”嫌なこと。苦しいこと”

ふわっとリャナンシーは私の回りをくるくると踊る。

”　たほうがいい”

「さっきのこと？」

”……”

「そうそう。ほんと、あんな気持ち悪いのなんて、忘れたほうがいいよね。あー、思い出しただけで吐きそう！」

”嫌なこと、覚える必要ない”

”愛羅様は、幸せ”

「うん、忘れるよー。覚えてたっていいことないし。都合の悪いことは忘れるに限るって言うしね！」

まじ名言！

異常に‘忘れる’を連呼するリャナンシーたちを不思議に思いながらも、私はそれすら考えることを放棄した。

「おっはよー！」

さあ、朝の気持ち悪いのなんてすっかりさっぱり忘れちゃうぞっ！

だって、だってだって！

それが杉浦愛羅だからーっ！

嫌なことは忘れるに限る！毎日をハッピーに過ごすため、脳内デリート！！

やあやあ、と部屋にいた王女と双子に挨拶をする。

「おはようございます、アイラ様」

「おはようございます」

椅子に座って優雅に微笑む王女。ステューシーは、私に椅子に座るよう促し、モスキュートはカップに紅茶を注いでいる。

「いい眺めだねえっ」

窓から差し込む光がきらきらしていて、なんだかあなたたち絵画のようですよ。ふほほ。

朝っぱらから、エロおやじ目線でニヤける私。

さて、ここで皆さん方に実況中継でもいたしましょうか！（↑脳内変換あり）

朝、日が射し込むテラスで王女が優雅にティーカップを傾ける。
こく、と上下する喉が艶めかしい。薄い桃色の唇が、濡れて輝きを持ってカップから離された。
目が合うと、直ぐにぱっと逸らされて、彼女は潤んだ目でほんのり頬を染めて俯く。

「そんなに、…見ないで」

その横で、メイド服を着た双子が働いている。
すらりとメイド服から突き出る手足は無防備にこちらを誘っている。
動く度にふわりとスカートが揺れ、否応なしに目線を引きつける。
かがめば、年不相応な胸が、たゆん…と揺れた。

「ご主人様…、」
「…本日はどちらになさいますか？」

あ、あかん。出血が止まらん。
やめたまえ君たち。
そんなこと…。

残念な愛羅の頭の中の妄想を、３人は全く知らずに、和やかな会話をしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3983j/

はじまり

2011年8月30日11時01分発行